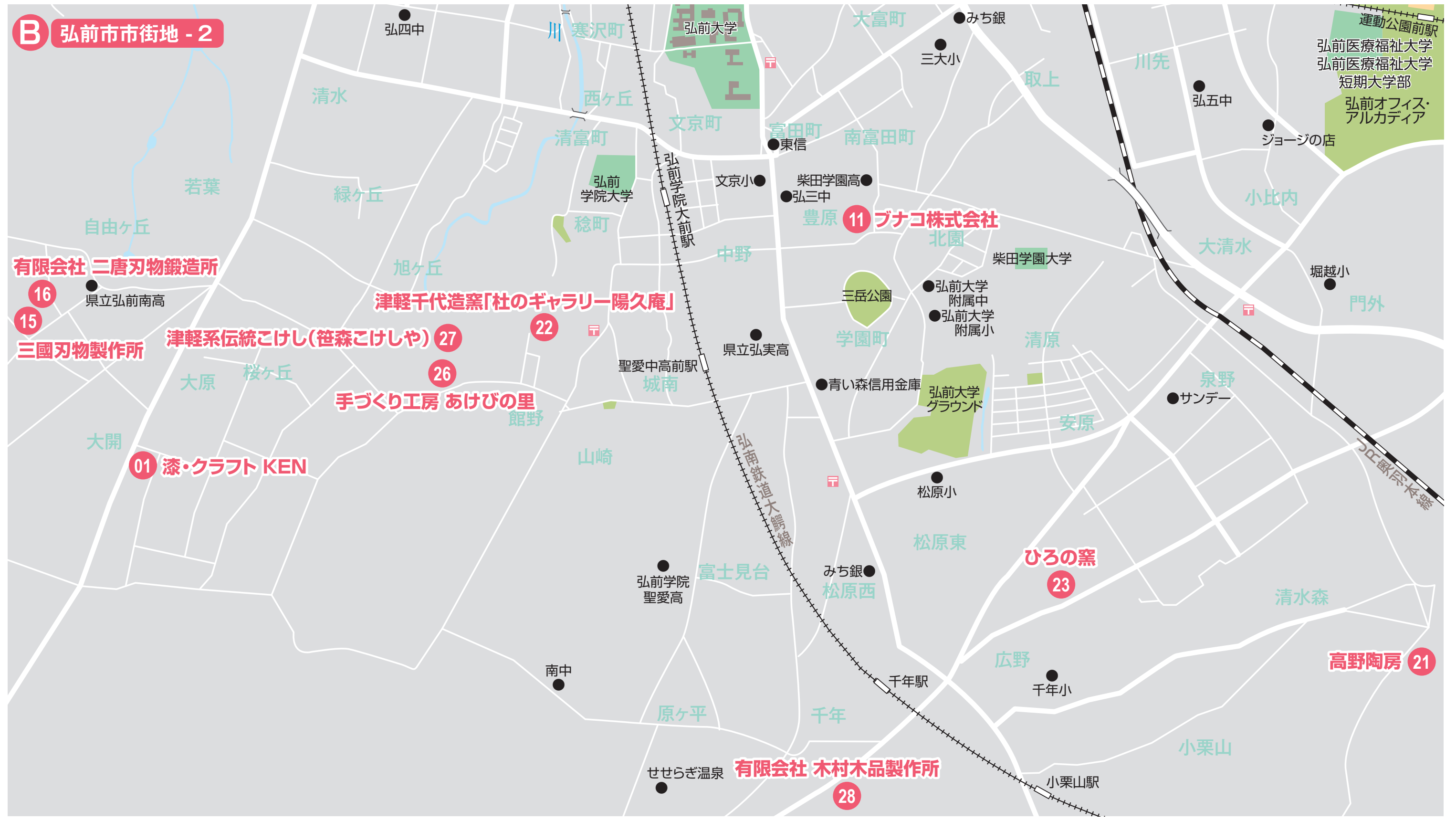
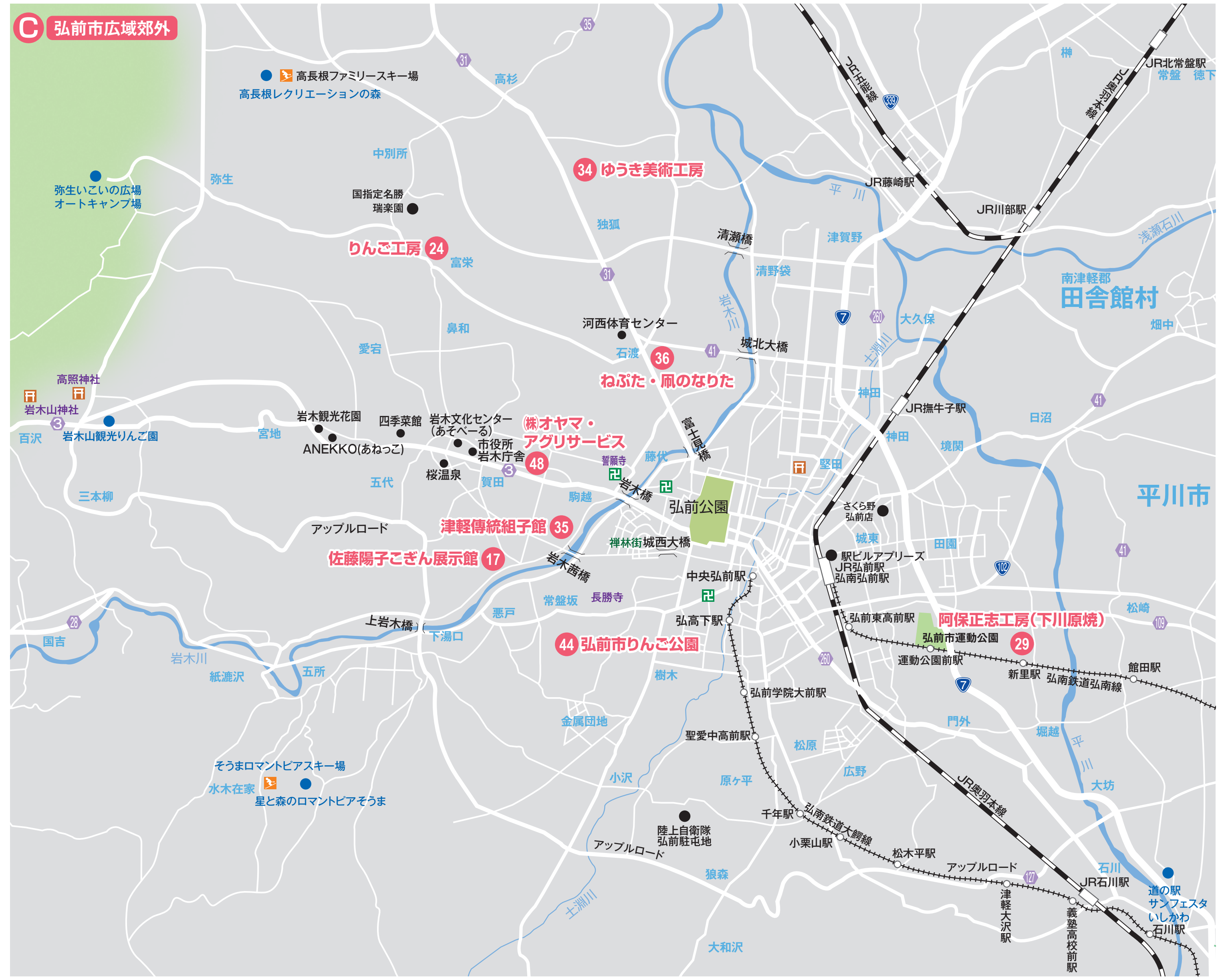

B 弘前市市街地 - 2
有限会社 二唐刃物鍛造所 16
15 三國刃物製作所
津軽系伝統こけし（笹森こけしや） 27
津軽千代造窯「杜のギャラリー陽久庵」 22
26 手づくり工房 あけびの里
01 漆・クラフト KEN
11 ブナコ株式会社
ひろの窯 23
高野陶房 21
有限会社 木村木品製作所 28
弘前大学
弘南鉄道大鰐線
JR奥羽本線


C 弘前市広域郊外
34 ゆうき美術工房
りんご工房 24
36 ねぷた・凧のなりた
㈱オヤマ・アグリサービス 48
津軽傳統組子館 35
佐藤陽子こぎん展示館 17
44 弘前市りんご公園
阿保正志工房（下川原焼） 29
弘前公園
田舎館村
平川市

※工房の見学は事前に各工房までご連絡お願いします。

弘前の伝統工芸品

🔴 青森県が指定する工芸品
🔵 それ以外の工芸品

津軽塗

津軽塗は、主にヒバの木地を用い、塗り、研ぎを繰り返し、最後の磨き上げまで、約50工程を経て完成される堅牢優美な伝統的漆器である。唐塗、ななこ塗、紋紗塗、錦塗の伝統的な４つの技法は現在まで脈々と受け継がれ、現代風のアレンジも加え、多様な紋様を生み出している。（昭和50年国の伝統的工芸品指定）

ブナコ

ブナコは昭和31年、当時の青森県工業試験場で研究開発され、民間企業の手で商品化された。主にブナ材を用い、薄いブナのテープを巻いて押し出すというブナコ独特の成形技術は、割れ、狂いのない高品質の木地を作り出している。卓上用品から家具・インテリアへと幅を広げ、今日では、弘前が誇る新しい木のクラフトとして海外からも注目されている。

津軽こぎん刺し

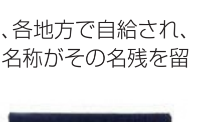
津軽のこぎん刺しは、江戸時代、農村の女性が野良着の麻布を木綿糸で刺して保温と補強をした「刺しこ」から発展している。藍染めの麻布の織り目に沿って、白い木綿糸で規則的に刺すことで、「津軽こぎん刺し紋様」と呼ばれる独特な幾何学紋様を生み出した。現在では多彩な色合いのこぎん刺しが作られ、生活雑貨からファッションまで製品も多様である。

津軽打刃物

藩政時代には多くの鍛冶屋があり、武器、農具、工具、包丁などを製造していた。現在では少数となったが、伝統的な火造り、「泥塗り」などの焼入れ技術を受け継ぎ、優れた切れ味と耐久性に富んだ品質の高い包丁類が生産されている。また、りんごの産地である津軽には欠かすことのできない摘果・枝切り用の剪定鋏も高い品質を誇っている。

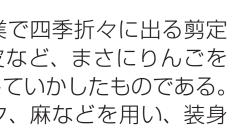
津軽焼

津軽焼の源流は、元禄４年（1691年）に平清水三右衛門、瀬戸助、久兵衛らによって築窯された平清水焼、後に興された大沢焼、下河原焼、悪戸焼にある。大正末期頃に悪戸焼が廃窯となって途絶えてしまったが、昭和に入って再興が果たされ、現在に至っている。黒天目釉・海鼠釉・りんご灰釉など多彩な釉薬が醸し出す独特の色合いは、素朴さと芸術性を兼ね備えた焼き物である。



下川原焼土人形

文化年間（1804年～ 1814年）に９代藩主寧親が津軽の地に玩具が少ないことを憂いて、下川原にあった藩窯の陶師、高谷金蔵、太田粂次郎らに作らせたのが始まりといわれている。主に冬期間を利用して作られていたが、廃藩後は本業として種々の人形を作るようになった。現在、約200種の伝来の型があり、特に「鳩笛」「雛人形」などが親しまれている。



あけび蔓細工

江戸時代から、津軽地方には、豊富なあけび蔓や山ぶどう蔓などの材料を使った様々な編組品があった。編み方には並編み、こだし編み、グニ編みなど色々あり、その模様も様々である。自然の素材の特長を生かし、温かさを持った美しい編組製品として需要が高く、民芸品としても全国的に高く評価されている。

津軽竹籠

東北には「根曲がり竹」という根元の曲がった耐久性に優れた竹がある。

「りんごの手かご」として知られる竹細工は、この根曲がり竹で作られ、愛宕地区で生産されている。他産地の竹製品とは異なり、六角目など大まかな編み目で作られ、野趣豊かである。近年ではかご類を始め、小物入れなどが、民芸品として多くの人々に親しまれている。

弘前こけし・木地玩具

津軽系こけしは、黒石市、大鰐町、弘前市で作られたこけしの総称である。明治時代から、津軽地方内の木地師および津軽と他県の木地師との交流が盛んに行われており、弘前こけしは、その中でも大鰐系の流れをくむものとして現在に受け継がれている。また、こけし作りとともにこまやダルマなどの木地玩具も盛んに作られ、地域の人々に愛されている。

津軽凧

藩士の手内職として、江戸時代から作られるようになったと言われており、津軽特産のヒバ材を使用した骨組に、浮世絵や三国志、水滸伝等の挿絵をもとにした武者絵を特徴としている。そこには武士の魂が込められており、津軽の風土に育まれ、現在に受け継がれている。

錦石

古くは室町時代より「陸奥の錦石」として名高い青森の錦石は、碧玉、めのう、玉髄などの石英に各種金属イオンが混入したことにより、複雑で格調のある色彩が交錯したものである。現在では、観賞用の美石のほか、指輪、ブローチなどの装飾具として広く活用されている。

津軽桐下駄

日本人の履物として古代より用いられてきた下駄は、江戸時代になって広く流行し、津軽においても隆盛を極めた。下駄の材料には桐が最も適しており、軽い・柔らかい・反動が少ない、温度変化が少ないなどの特徴がある。津軽の桐は、木質も堅く、木目も美しい。白木の下駄のほか、雪下駄、津軽塗下駄など、しっとりした雰囲気を持っている。

太鼓

１本の木をくりぬいた胴に馬や牛の皮張りをして仕上げるのはもちろんのこと、桶作りの手法を用いた太鼓作りが「ねぷたの地」弘前ならではの製品。直径４メートルの「津軽情っ張り大太鼓」も地元で作り上げた名品である。

津軽天然藍染

藍染は江戸時代に確立し、各地方で自給され、城下町では、紺屋町などの名称がその名残を留めている。藍染は天然染料の代表的染色技法で、濃い色の中にも透明感のある美しさがある。また、染めては洗い、空気酸化させることを繰り返し、色落ちのない堅牢な染色が大きな特徴である。

りんご染

りんごの手入れ作業で四季折々に出る剪定枝・摘花・摘葉・樹皮など、まさにりんごをまるごと天然染料としていかしたものである。生地は主に綿、シルク、麻などを用い、装身具などの小物、袋物、その他工芸品にアイテムを広げ、特有の優しい彩り豊かな数々の製品を生み出している。

HIROSAKI CRAFT MAP

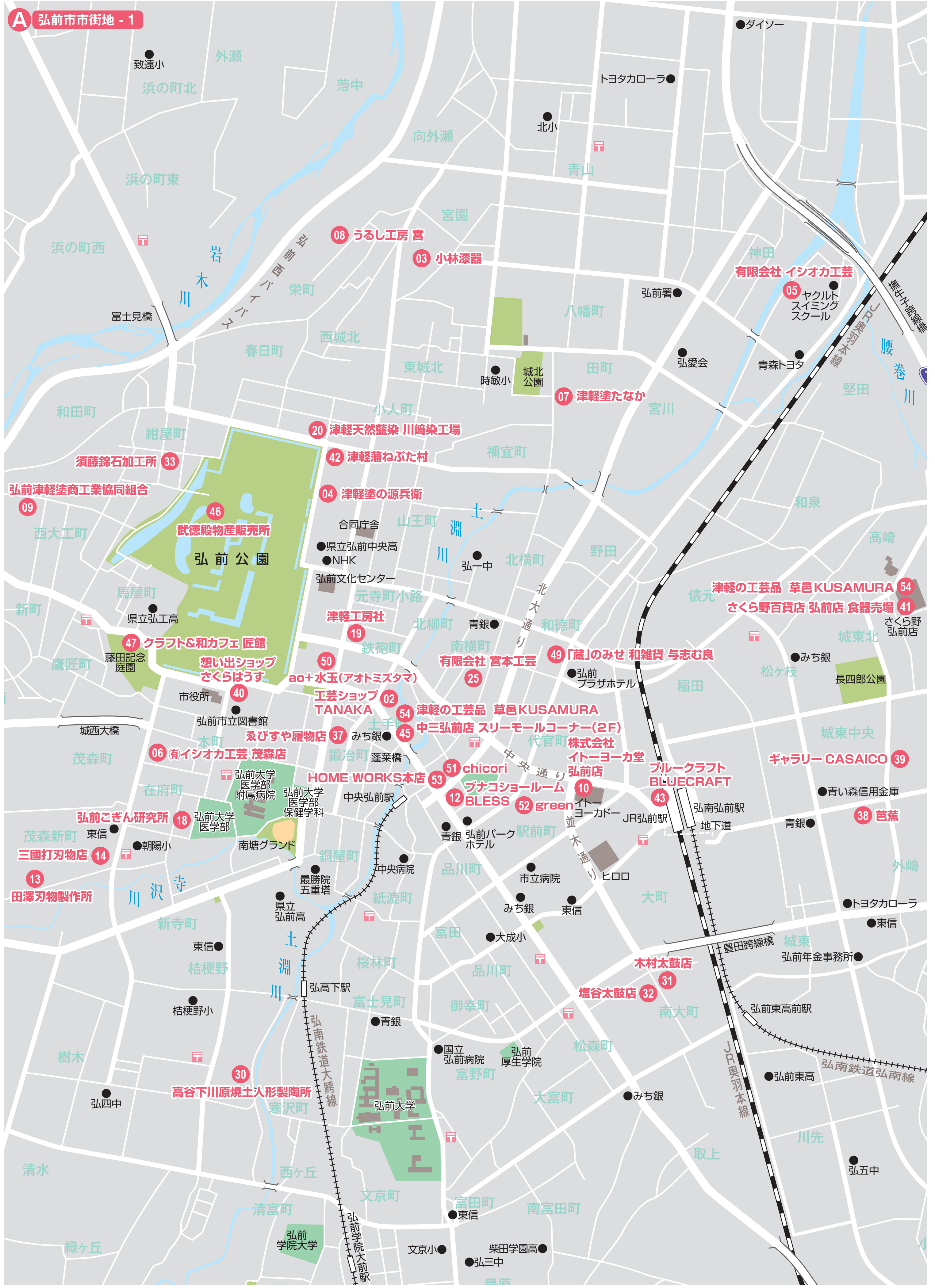
Ver.4

Take FREE
ご自由にお持ちください

市内の工房・ショップ５５か所掲載

弘前市は藩政時代以来４００年以上の歴史を持つ城下町。津軽地域の政治、経済、文化の中心都市として発展してきました。

その歴史の中で、津軽の厳しい冬や風土、そして城下町の文化は、人々のなりわいや生きる術として、数々の工芸品を生み出しました。


A 弘前市市街地 - 1
08 うるし工房 宮
03 小林漆器
有限会社 イシオカ工芸 05
07 津軽塗たなか
20 津軽天然藍染 川﨑染工場
42 津軽藩ねぷた村
須藤錦石加工所 33
弘前津軽塗商工業協同組合 09
04 津軽塗の源兵衛
46 武徳殿物産販売所
弘前公園
津軽工房社 19
47 クラフト&和カフェ 匠館
想い出ショップ さくらはうす 40
50 ao+水玉（アオトミズタマ）
工芸ショップ TANAKA 02
有限会社 宮本工芸 25
49「蔵」のみせ 和雑貨 与志む良
津軽の工芸品 草邑KUSAMURA 54
さくら野百貨店 弘前店 食器売場 41
54 津軽の工芸品 草邑KUSAMURA
45 中三弘前店 スリーモールコーナー（2F）
えびすや履物店 37
06 ㈲イシオカ工芸 茂森店
51 chicori
HOME WORKS本店 53
ブナコショールーム
12 BLESS
52 green
株式会社 イトーヨーカ堂 弘前店 10
ブルークラフト BLUECRAFT 43
ギャラリー CASAICO 39
38 芭蕉
弘前こぎん研究所 18
三國打刃物店 14
13 田澤刃物製作所
30 高谷下川原焼土人形製陶所
木村太鼓店 31
塩谷太鼓店 32
JR弘前駅
弘前大学